

# 自己を見つめ、在り方生き方を考える児童生徒を育てる授業づくり

－発達段階に応じた道徳科の指導方法の工夫を通して－

〈道徳教育研究グループ〉

阿部 さやか<sup>1</sup>、渡邊 真一<sup>2</sup>、岡 拓真<sup>3</sup>、吉田 成行<sup>4</sup>、菅原 啓士<sup>5</sup>、奥山 香<sup>5</sup>、秋葉 行<sup>5</sup>  
 亘理町立亘理小学校<sup>1</sup>、石巻市立石巻小学校<sup>2</sup>、東松島市立矢本第一中学校<sup>3</sup>、宮城県登米高等学校<sup>4</sup>、宮城県総合教育センター<sup>5</sup>

【要約】 本研究では、児童生徒の道徳性に関わる発達の様子をまとめた「発達の段階一覧表」を踏まえて指導方法を工夫するための視点を作成し、自己を見つめ、在り方生き方を考える児童生徒を育てる授業づくりを目指した。小・中学校における実践では、「発達の段階一覧表」を踏まえてねらいを焦点化し、具体的な手立てを考え、道徳科の授業を展開した。高等学校における実践では、「発達の段階一覧表」を踏まえて道徳教育の指導を考え、各教科・科目等で展開した。児童生徒の発言や記述の内容と授業を参観した教師への質問調査を分析した結果、発達の段階に応じた道徳科の指導方法の工夫が、自己を見つめ、在り方生き方を考える児童生徒を育てる授業づくりにつながることを確認することができた。

【キーワード】 授業づくり、発達の段階、道徳科、高等学校の道徳教育、在り方生き方

## 1 はじめに

現在、グローバル化が進む中で、様々な価値観を持つ人々が相互に尊重し合いながら生きることや、予測困難な時代の中で、一人一人が答えのない問題に誠実に向き合い、人としての生き方や社会の在り方を考えることが課題となっている。こうした課題に対応していくためには、一人一人が、道徳的価値の自覚のもと、自ら感じ、考え、他者と対話し協働しながら、よりよい方向を目指す資質・能力を備えることが重要である。こうした資質・能力の育成に向け、道徳教育は大きな役割を果たす必要がある。そこで、道徳教育の改善・充実に向けて、小・中学校では道徳科が特別の教科として位置付けられ、多様で効果的な指導の重要性が高まり、高等学校では道徳教育の指導のための配慮が求められた。特に、道徳教育の目標は、全ての学校段階で「他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養うこと」を共通としながら、小学校は「自己の生き方」、中学校は「人間としての生き方」、高等学校は「人間としての在り方生き方」を考えるよう示され、長期的展望に基づいた指導を行うことが求められている。

本県においては、第2期宮城県教育振興基本計画の中で、いじめ問題への対応と不登校児童生徒の増加への対応が課題として挙げられている。そして、課題を解決するための方法の一つに、道徳教育の充実を目指すことが示されている。小・中学校では、道徳の教科化に向けて、道徳教育に関わる研修会や研究が盛んに行われるようになったことで、年間35時間の授業を確実に実践する教師の意識が高まり、量的確保が図られた。一方で、「道徳教育の在り方に関する懇談会」で指摘された「学年が上がるにつれて、道徳の時間に関する児童生徒の受け止めがよく

ない状況がある」「児童生徒の発達の段階をより重視した指導方法の確立・普及」<sup>1)</sup>等といった質的転換が十分に図られていないという課題がある。また、高等学校では、学校の道徳教育の目標を実現するために、全教師が道徳教育への意識を共有し、計画的に指導を展開することが求められている。

以上のことから、小学校から高等学校までの児童生徒の道徳性に関わる発達を見据え、指導する学級や学年の児童生徒の道徳性の発達を客観的に捉えたり、一人一人の道徳性の発達を系統的に捉えたりしながら、指導方法を工夫する必要があると考えた。そこで、小学校から高等学校までの児童生徒の道徳性に関わる発達を文献で調査し、各学校・学年段階の道徳性に関わる発達を捉える目安となるように「発達の段階一覧表」を作成した。小・中学校の研究では、「発達の段階一覧表」を踏まえて道徳科の授業づくりを行うための考え方を「発達の段階に応じた授業づくりの視点」にまとめ、その視点を用いて道徳科の授業を展開した。高等学校の研究では、「発達の段階一覧表」を踏まえて各教科・科目等で道徳教育を行うための考え方を「発達の段階に応じた道徳教育を展開するための視点」にまとめ、その視点を用いて公民科と特別活動で道徳教育を展開した。

研修員が実践した授業について、児童生徒の発言や記述の内容と参観した教師への質問調査を分析し、「発達の段階一覧表」とそれぞれの視点が、自己を見つめ、在り方生き方を考える児童生徒を育てる授業づくりに有効であるかを確かめた。

## 2 研究の内容

### (1) 「発達の段階一覧表」の作成

小学校から高等学校までの児童生徒の道徳性に関

わる発達を見据えて、道徳科の指導方法を工夫するために、児童生徒の道徳性に関わる発達を文献<sup>2)</sup>で調査した。調査した内容から、道徳科や道徳教育の指導に深く関わる発達を整理し、「発達の段階一覧表」にまとめた。また、道徳性は心身の成長と共に発達していくが、個人差もあるため決まった捉え方はできないことも分かった。このことから、各学校・学年段階の道徳性に関わる発達を捉えるための目安となるようにまとめ、指導する学年や学級の児童生徒の道徳性の発達を客観的に捉えたり、児童生徒一人一人の道徳性の発達を系統的に捉えたりする際に役立つものとした。

「発達の段階一覧表」は、次の3つの場面で用いることにした。1つ目は、小・中学校の道徳科の授業づくりの場面である。指導観を明確にしてねらいを焦点化し、具体的手立てを考えるために用いることにした。2つ目は、高等学校の各教科・科目等の道徳教育を展開する際に、高校生の発達にふさわしい指導を考えるために用いることにした。3つ目は、授業における指導の手立てや指導方法が発達の段階に応じたものであったか、検証する場面である。児童生徒の発言や記述を「発達の段階一覧表」と照らし合わせて分析し、手立てや指導方法の有効性を検証するために用いることにした。

**(2) 小・中学校の道徳科の授業づくり**

小・中学校の道徳科の授業づくりを「教師の指導観を明確にしてねらいを焦点化した上で、具体的な手立てを考えて授業を行い、児童生徒の学びと教師の指導を教師が評価すること」とした。教師の「指導観」は「内容項目の理解」「実態把握」「教材の活用」の3つで成り立つものとした。そこで、「発達の段階一覧表」を踏まえた「内容項目の理解」「実態把握」「教材の活用」と「ねらいの焦点化」及び「指導の手立ての具体」を「発達の段階に応じた授業づくりの視点」としてまとめた（表1）。

表1 「発達の段階に応じた授業づくりの視点」とその内容

視点	内容
「発達の段階一覧表」を踏まえた内容項目の理解	学習指導要領に示されている『道徳の内容』の学年段階・学校段階の一覧と「発達の段階一覧表」を踏まえて、ねらいとする道徳的価値を明確にすること。
「発達の段階一覧表」を踏まえた実態把握	「発達の段階一覧表」を踏まえて、指導する児童生徒の道徳性の発達を客観的に捉えたり、一人一人の道徳性の発達を系統的に捉えたりして、ねらいとする道徳的価値に対する児童生徒の見方や考え方を把握すること。
「発達の段階一覧表」を踏まえた教材の活用	「内容項目の理解」で明確にしたねらいとする道徳的価値を踏まえて、教材の内容と「発達の段階一覧表」を照らし合わせて、教材の活用の仕方考えること。

ねらいの焦点化	「内容項目の理解」「実態把握」「教材の活用」で明確にした指導観を基に、ねらいを設定すること。
指導の手立ての具体	ねらいを達成するために、具体的な手立てを考えること。

「発達の段階に応じた授業づくりの視点」と併せて「授業づくりシート」を作成した。「授業づくりシート」は、「発達の段階に応じた授業づくりの視点」を用いて授業をつくるための一助とした。

**(3) 高等学校の各教科・科目等の道徳教育**

高等学校の各教科・科目等の授業づくりは、各教科・科目等の担当者に任されている。一方、学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育は、学校の道徳教育の目標を実現するために、全教師が道徳教育への意識を共有し、計画的に展開するべきものである。そこで、高等学校の研究では、各教科・科目等の担当者が授業づくりをする際に、高校生の発達にふさわしい道徳教育の指導を行うための考え方を「発達の段階に応じた道徳教育を展開するための視点」としてまとめた（表2）。

表2 「発達の段階に応じた道徳教育を展開するための視点」とその内容

視点	内容
人間としての在り方生き方に関する教育への意識	高等学校の道徳教育では、人間としての在り方生き方について生徒に考えさせる指導を行い、自己実現に資する教育活動を展開するよう意識すること。
自校の道徳教育の段階の確認	教育目標や道徳教育重点目標で目指す生徒像に向けて、「発達の段階一覧表」を踏まえて実態を捉え、道徳科の学びを系統的に理解すること。
各教科・科目等の指導と道徳教育のつながりへの意識	各教科・科目等における「学びに向かう力、人間性等」についての目標が、道徳教育に深く関わることを意識すること。

「発達の段階に応じた道徳教育を展開するための視点」と併せて「高校道徳シート」を作成した。「高校道徳シート」は、「発達の段階に応じた道徳教育を展開するための視点」を用いて、各教科・科目等を担当する教師が授業で道徳教育に関わる場面や指導方法を具体化する一助とした。

**3 実践研究**

所属校で、研修員が授業実践を行った（表3）。

表3 実践した授業の内容項目または単元名、題材名

	学年	内容項目または単元名、題材名
小学校	1年	善悪の判断, 自律, 自由と責任
	3年	勤労, 公共の精神
	5年	親切, 思いやり
	6年	生命の尊さ

	6年	正直，誠実
	6年	相互理解，寛容
中学校	2年	相互理解，寛容
	2年	遵法精神，公德心
	3年	勤労
高等学校	1年	現代社会「生命倫理」
	3年	特別活動（ホームルーム活動）「キャリア形成と自己実現」

(1) 小・中学校の道徳科の授業づくり

「発達の段階に応じた授業づくりの視点」が、自己を見つめ、在り方生き方を考える児童生徒を育てる授業づくりに有効であるか、手立てに対する児童生徒の発言や記述を分析し、考察した。

① 小学校6学年 内容項目「正直，誠実」

使用教材は、東京書籍発行の「新しい道徳6（第6学年）」の「手品師」である。

ア 教師の明確な指導観とねらいの焦点化

「発達の段階に応じた授業づくりの視点」を用いて指導観を明確にし、ねらいを焦点化した（表4）。

表4 小学校6学年 内容項目「正直，誠実」の授業の指導観とねらい

内容項目の理解	実態把握	教材の活用
自律的に物事を判断できる時期を踏まえ、自己の生き方に対する自分なりの誠実さを考えさせたい。	他者との関係を気にして、周囲に流される児童が多い。自分にうそをつかず、明るく生きることのよさに気付かせたい。	手品師が自分の心に向き合って行為を決めた場面に焦点を当て、自分なりの誠実さを考える問題意識を持たせたい。
<b>ねらい</b>	手品師が自分の心に向き合って行為を決めた場面について考えることをきっかけとして、自分にうそをつかず明るく生きようとする道徳的判断力を育てる。	

イ 指導の手立てと授業の実際

自律的に物事を判断したり、行為の結果と動機の両面から物事を考えたりできる時期であることを踏まえ、様々な見方で誠実さを考えさせるために「みなさんにとって、誠実にするとはどうすることか」をテーマ発問に設定した。また、「発達の段階一覧表」から、客観的な見方や批判的な見方が備わっている時期であることを踏まえ、発問に対して様々な見方で児童が反応することを想定し、補助発問や問い返しを考えた。

「僕にとっては夢を達成することが大切」「私は約束を守ることを大切にしたい」「自分にうそをつかず、自分の考えを大切にしたい」等、児童は様々な見方で誠実さについて考えた。

ウ 考察

「発達の段階一覧表」を踏まえた実態把握から、高学年段階を越えて中学校段階の見方や考え方ができる児童と中学年段階の見方や考え方で物事を考える児童を想定し、問い返しや補助発問を具体的に考

えた授業を展開できた。そのため、広く児童の発言を受け止めながらねらいの達成に向かうことができた。このことから、「発達の段階一覧表」と「発達の段階に応じた授業づくりの視点」の有効性を確認することができた。

② 中学校2学年 内容項目「遵法精神，公德心」

使用教材は、文部科学省発行の「私たちの道徳 中学校」の「二通の手紙」である。

ア 教師の明確な指導観とねらいの焦点化

「発達の段階に応じた授業づくりの視点」を用いて指導観を明確にし、ねらいを焦点化した（表5）。

表5 中学校2学年 内容項目「遵法精神，公德心」の授業の指導観とねらい

内容項目の理解	実態把握	教材の活用
社会に関わる様々な立場の考えに気付かせ、安定した社会を実現するための法やきまりのよりよい在り方を考えさせたい。	法やきまりの意義を進んで考える生徒がいる。法やきまりが社会の安定を支えていることに気付かせたい。	きまりを破った「元さん」の行為について考えることをきっかけとして、法やきまりのよりよい在り方を考えさせたい。
<b>ねらい</b>	守る側と守らせる側の双方の立場から法やきまりについて考え、議論することを通して、法やきまりのよりよい在り方を積極的に考えようとする道徳的実践意欲や態度を育てる。	

イ 指導の手立てと授業の実際

「発達の段階一覧表」から、今までの自分の価値観を捉え直したり、社会組織全体の視点で物事を考えたりできる時期であることを踏まえ、教材に登場する「元さん」の行為について考えることをきっかけに、きまりの在り方について問題意識を持たせる導入にした。また、物事を多面的・多角的に考えることができる時期であることを踏まえ、守る側と守らせる側の双方の立場からきまりの意義や在り方を考えさせる展開を考え、それぞれの立場の考えや思いを生徒が理解できるように板書や発問を工夫した。

「厳しすぎるきまりで自由が制限されることはおかしい」「きまりがあることで守られている面もある」「きまりがなければ社会が成り立たない」等、様々な立場できまりの意義を生徒が考え、法やきまりのよりよい在り方を話し合った。

ウ 考察

「発達の段階一覧表」を踏まえた教材の活用から、中学校段階は、法やきまりの意義を理解していることを前提にすることで、教材の扱う場面や扱い方をよりはっきりさせることができた。また、「発達の段階一覧表」を踏まえた実態把握から、きまりを守る側と守らせる側の双方の立場で考える生徒の姿を想定したことが、板書の工夫や発問の具体につながった。このことから、「発達の段階一覧表」と「発達の段階に応じた授業づくりの視点」の有効性を確

認することができた。

(2) 高等学校の各教科・科目等の道徳教育

「発達の段階に応じた道徳教育を展開するための視点」を用いて考えた指導が、自己を見つめ、在り方生き方を考える生徒を育てる授業づくりに有効であるか、生徒の発言や記述を分析し、考察した。

① 高等学校3学年 特別活動(ホームルーム活動)

題材名「キャリア形成と自己実現」

ア 本時の活動と道徳教育の関連

本題材の目標は「企業を選択する理由を考えることを通して、将来の生き方を描き、社会的・職業的自立に向けて自己実現を図ろうとする態度を養う」である。「発達の段階に応じた道徳教育を展開するための視点」から、本題材の「企業を選択する理由を考える」活動が、生徒に人間としての在り方生き方を考えさせる場面であると捉えた(表6)。

表6 高等学校3学年 題材名「キャリア形成と自己実現」の活動と「発達の段階に応じた道徳教育を展開するための視点」との関連

視点	関連
人間としての在り方生き方に関する教育への意識	本題材の目標「社会的・職業的自立に向けて自己実現を図ろうとする態度を養う」ことそのものが、人間としての在り方生き方に関する教育に深く関わる。
自校の道徳教育全体計画と発達の段階の確認	自校の道徳教育で目指す生徒の姿の「教養を身に付け、社会人として自立した生活が送れる人間を育成する」に関わる。また、人間としての在り方生き方についての関心が高まり、自己の価値観や人生観に照らし合わせて、進路選択をする時期である。
各教科・科目等の指導と道徳教育のつながりへの意識	ホームルーム活動の目標である「人間としての在り方生き方についての自覚を深め、自己実現を図ろうとする態度を養う」ことが、道徳教育に深く関わる。

イ 指導の手立てと授業の実際

「発達の段階一覧表」から、人間としての在り方生き方について、将来の自分と照らし合わせて考えられる時期であることを踏まえ、企業を選択する理由を議論させることが、高校3年生の発達にふさわしい指導であると捉えた。

授業では、「様々な意見があるが、自分は夢に向かって生きたい」「周りの人に合わせることも大切だが、自分らしさを大切にしたい」等、自己実現を図るために大切にしたい思いを生徒が考えた。

ウ 考察

ホームルーム活動を行う際に、「発達の段階に応じた道徳教育を展開するための視点」を用いたことで、活動の中で道徳教育に関わる場面を想定することができた。また、道徳科の学びを系統的に踏まえることで、自分なりの価値観や判断基準を基に、企業を選択する理由を議論させる指導法を工夫し、実

践することができた。このことから、「発達の段階一覧表」と「発達の段階に応じた道徳教育を展開するための視点」の有効性を確認できた。

4 研究の検証

(1) 児童生徒の姿から

それぞれの実践で、授業で目指す児童生徒の具体の発言や記述を「授業づくりシート」や学習指導案に示し、目指す児童生徒に関連した発言や記述がどの程度表れていたかを確認した。目指す児童生徒に関連した発言や記述の一部を以下にまとめた(表7)。

表7 目指す児童生徒に関連した発言や記述(一部抜粋)

学年	実践	発言や記述
小学校 3年	道徳科 内容項目 勤労、公共の精神	みんなと助け合って気持ちよく過ごすことができるように自分の仕事をやりたい。
小学校 6年	道徳科 内容項目 正直、誠実	手品師が夢と約束を両立する方法はなかったのだろうか。誠実な生き方として、本当に正しかったのか。
中学校 2年	道徳科 内容項目 遵法精神、公德心	規則を作る側の気持ちが分かったし、守る側の気持ちも分かる。難しい問題だなと感じた。
高等 学校 3年	ホームルーム活動 題材名 キャリア形成と自己実現	周りの人に合わせることも大切であるが、人にはそれぞれ個性がある。自分らしさを大切に生きていくことは人生で多くのものを得ると思った。

児童生徒の発言や記述の内容を「発達の段階一覧表」と照らし合わせて分析した。分析の結果、中学年の児童は、身近な人に認められる経験を通して、道徳的価値を実現することのよさを感じ取る段階であることが分かった。高学年の児童は、自律的な態度が身に付き、道徳的価値に対する自分と他者の考えを比較し、検討できることが分かった。中学校の生徒は、より多面的・多角的な見方で人間としての生き方を考えられることが分かった。高等学校の生徒は、中学校までの道徳科の学びを踏まえ、自分なりの人生観や価値観を持って物事を考えられることが分かった。

以上のことから、「発達の段階一覧表」を用いて児童生徒の道徳性に関わる発達を目安として捉えることが、指導の手立てや指導法を考える際に役立つことを確認できた。

(2) 授業を参観した教師への質問調査から

所属校教師に研修員の授業を参観してもらい、参観後にアンケートの記入やインタビューを行った。質問調査の対象は、小・中学校が学級担任や学年担当等、高等学校が学年担当や教科・科目等担当であ

る（図1）。

<p><b>小学校1学年の実践に対する内容</b></p> <p>授業を参観して、ねらいの「よいと思ったこと」を教師がどのように考え、ねらいをはっきりさせるかが大切だと思った。</p> <p><b>小学校6学年の実践に対する内容</b></p> <p>授業中の先生の問い返しを聞いて、中学校への見通しを持たせていたことが分かった。指導する内容の系統性を先生が意識していて、道徳の時間を教科にした意味がよく分かった。</p> <p><b>中学校2学年の実践に対する内容</b></p> <p>考えさせる立場や視点を変えた発問で、生徒が様々な視点から物事を考えていた。教材を離れ、日常生活に関わる内容について話し合う時間を多く確保したことが参考になった。</p> <p><b>高等学校3学年のホームルーム活動に対する内容</b></p> <p>普段の取組（授業のみならず、学校行事、部活動も含めて）を道徳教育の視点で見直すことから始めていくことが、道徳教育を進める上で大切であることが分かった。</p>
---

図1 授業を参観した教師への質問調査の回答（一部抜粋）

以上のような教師の意見や感想を分析した結果、小・中学校の研究では、「発達の段階に応じた授業づくりの視点」を用いて道徳科の授業をつくるのが、ねらいを明確にし、指導する学年や学級の児童生徒に応じた指導を展開することにつながることを確認できた。また、高等学校の研究では、「発達の段階に応じた道徳教育を展開するための視点」を用いて道徳教育の指導を展開することが、各教科・科目等の指導と道徳教育の関連を意識することにつながることを確認できた。一方で、「道徳科の授業の参考になったが、授業づくりの難しさを感じた」「高校の道徳教育の意識を共有することは難しい」等の意見があったことを次年度の課題とし、解決する必要があることを把握できた。

## 5 おわりに

### (1) 研究の成果

#### ① 「発達の段階一覧表」

「発達の段階一覧表」を用いることで、3点の有効性を捉えることができた。1点目は、道徳性に関わる児童生徒の発達を小学校から高等学校まで見据えることができた点である。このことは、長期的展望に基づいた道徳科の授業づくりや道徳教育の指導を考えることに役立つことが分かった。2点目は、指導する学年や学級の児童生徒の道徳性の発達を客観的に捉えたり、児童生徒一人一人の道徳性の発達を系統的に捉えたりすることができる点である。このことは、指導する児童生徒の発達にふさわしい授業を考えたり、個に応じた指導に生かしたりする際に役立つことが分かった。3点目は、授業評価に活用できる点である。例えば、自分との関わりをどこまで広げて児童生徒が考えられていたか、また、実践した授業者の手立てが発達の段階に応じたもので

あったか等の見取りとして活用できることから、授業評価に役立つことが分かった。

#### ② 小・中学校の道徳科の授業づくり

児童生徒の発言や記述を分析した結果、「発達の段階に応じた授業づくりの視点」は、教師の指導観を明確にした授業や道徳科の指導の系統性を意識した授業をつくるために活用できることが分かった。

#### ③ 高等学校の各教科・科目等の道徳教育

生徒の発言や記述を分析した結果、「発達の段階に応じた道徳教育を展開するための視点」は、高校生の発達にふさわしい道徳教育の指導を考えるために活用できることが分かった。また、教師が担当する教科・科目の授業づくりをする際に「発達の段階に応じた道徳教育を展開するための視点」を意識することが、道徳教育に対する共通意識につながることを確認できた。

### (2) 今後の展望

小・中学校の道徳科の授業づくりについては、継続した実践を研修員が行い、児童生徒の変容を分析して、有効性を明らかにする必要がある。また、「発達の段階に応じた授業づくりの視点」を活用した授業づくり研修会を検討し、本研究の普及を図ることも必要である。高等学校の各教科・科目等の道徳教育については、「発達の段階に応じた道徳教育を展開するための視点」を、各学校の道徳教育推進教師と連携した研修会等で普及させ、道徳教育の意識の共有を図ることが必要である。

#### 【引用・参考文献】

- 1) 文部科学省：「考える道徳への転換に向けたワーキンググループ資料」, 2016
- 2) 文部科学省：「子どもの徳育の充実に向けた在り方について（報告）」, 2009
- 文部科学省：「小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」, 2018
- 文部科学省：「中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」, 2018
- 文部科学省：「高等学校学習指導要領解説 総則編」, 2019
- 永田繁雄：「発達段階によって子どもの学びを変える」,（「道徳教育」2013年7月号）
- 波多野完治：「波多野完治全集第4巻ピアジェ 人と思想」, 1990
- 井口祥子：「子供の認知発達に応じた道徳判断の育て方」, 2010
- 内藤俊史：「子ども・社会・文化―道徳的なこころの発達―」, 1991
- 松原達哉：「学校カウンセリング講座 児童・生徒理解の方法」, 1988

#### 【図表等の許諾について】

表7は、授業実践の中で児童生徒が発言した内容や記述したワークシートの一部である。氏名を伏せて掲載することとし、所属校長から使用許諾を得た。

